



Title	ドイツ・デュッセルドルフ大学での日本語教育実習報告
Author(s)	梅下, 華琳
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 26-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ドイツ・デュッセルドルフ大学での日本語教育実習報告

梅下 華琳

1. はじめに

本稿は 2023 年 10 月から 2024 年 7 月にドイツのデュッセルドルフ大学（正式名称ハインリッヒ・ハイネ大学）の現代日本学科（Modernes Japan、以下 Moja と略す）において行われた、日本語教育実習の報告である。デュッセルドルフは、ドイツ北西部に位置する都市で、ノルトラインウェストファーレン州の州都である。多くの日系企業が進出しておらず、ヨーロッパで 3 番目に日本人が多い町として知られている。デュッセルドルフ大学はその南エリアの広い敷地にキャンパスを構え、中央駅から電車で約 15 分でアクセスできる好立地にありながら、落ち着いた環境を持つ総合大学である。

2. 日本語教育実習の概要

本実習に参加した教育実習生（以下、実習生）は 2 名であった。実習では約 10 か月、2 学期間（秋冬学期・春夏学期）にわたって、主に(1)TA（ティーチングアシスタント）、(2)宿題添削、(3)教壇実習の 3 つの業務に携わった。それぞれの業務では指導教員にあたる日本人日本語教師の先生方にご指導いただいた。

現代日本学科で日本語を学ぶ学生数は、初級（日本語 I・II）4 クラス約 80 名、中級（日本語 III・IV）3 クラス約 50 名である。どのレベルも、週 5 日、1

日 1 コマ日本語の授業があり、その都度プリント 1 ~2 枚の宿題を出し、語彙リストや教科書の練習問題の予習も課すというカリキュラム編成になっている。初級の授業は、現代日本学を専攻する学生だけでなく、副専攻とする学生も受講できるのに対し、中級の授業は、現代日本学を専攻する学生のみが受講できる。

さらに、本実習では、秋冬学期の修士課程の授業にも TA として参加させていただく機会を得た。アカデミックジャパンーズを受講している修士課程の学生は 6 名ほどであった。

表 1 は秋冬学期に割り当てられた実習担当時間割である。以下、業務内容について項目を分けて説明する。

2.1 TA

TA として参加した日本語 I ~IV の授業では、誤字や発音をチェックしたり、ペアワークや質問対応を行ったりした。教室の中を歩いて学生に声をかけることにより、授業の雰囲気をつかみ、学生との接し方を学ぶことができた。修士課程の授業では、研究発表が期末課題として設定されていた。プレゼンテーションの指導のほか、イントネーションや長音、アクセントなど発音面の練習をサポートした。

表 1 実習生の時間割（秋冬学期）

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
8:30~10:00	日本語 I	(日本語 III)	日本語 I 教壇実習		日本語 III
10:30~12:00	日本語 I	日本語 III	日本語 I 教壇実習		(日本語 III)
12:30~14:00				アカデミック ジャパンーズ	日本語 III
14:30~16:00		(日本語 III)			

2.2 宿題添削

宿題の提出はデュッセルドルフ大学のオンラインシステム上に行われる。提出された宿題をダウンロードし、タブレット端末で添削した後、再度システムにアップロードして学生に返却するという流れだった。基本的に提出翌日に返却するのが決まりであり、教員と実習生で分担して行った。初級と中級の宿題提出が重なった時は、1日に40名分の宿題を添削することもあり、時間と労力がかかる作業である。しかし、この作業を通して、学習者がつまずきやすいポイントを知ることができるため、授業を構成する際のヒントになったり、質問への返答をブラッシュアップできたりとさまざまところで役に立った。また、学期中5回ほど、初級も中級も作文の宿題があり、休日の過ごし方や好きなもの、地元のおすすめの場所といったテーマで400字程度の文章を添削した。はじめの頃は横書きの形式に戸惑ったり、カタカナ表記の仕方に正しいかどうか不安を感じたりしたが、辞書やインターネットで調べるうちに次第に慣れていった。学生のことを知る良い機会になり、課題のファイルに感想やコメントをそえることで学生とのコミュニケーションもはかどり、とても楽しい経験であった。

2.3 教壇実習

水曜日の初級日本語I・IIの授業を2週間ごとにもう一人の実習生と交代しながら担当した。自分が担当していない週の授業にはTAとして参加した。

教材は『みんなの日本語初級I』『みんなの日本語

初級II』(スリーエーネットワーク)を使用した。授業内容はドリル練習が中心だった。学生は授業前に学習する範囲の文法解説ビデオを予め視聴するほか、実習生が担当する一つ前の授業で導入や文法の説明を受けることになっている。そのため、復習として軽くおさらいしたあとは、授業の大半を教科書の練習問題を解く時間や、オリジナルゲームによる文型練習の時間に使った。ただ、学期中3回ほど文型を導入することもあった。

教案は授業担当週の前の金曜日までに作成し、指導教員に提出しなければならない。フィードバックを受けることで効率的な進め方を学ぶ。学期全体のカリキュラムのほかに、週間の細かい授業計画書が配布されるので、それそれに従って教案を作成した。指導教員の添削を参考に修正を加えたあと、パワーポイントを用意し、独自で考案したドリル練習に必要な教材を印刷するなどの準備をする。

授業後は、指導教員ともう一人の実習生からコメントを寄せられる。授業の構成や指示の出し方、目標とする技能(読む・話す・聞く・書く)などの技能に集中させるなど、さまざまな視点でアドバイスをもらった。

3. ブロックコース

春休み中に希望者のみが参加できるblockコースという集中講座が開講され、私たち実習生は初級クラスを2日間担当した。『みんなの日本語初級I』第1~17課で扱った文法・語彙・表現・漢字の復習ができる活動を実習生2人で考え実施した。表2は

表2 ブロックコースの授業内容

	1日目	2日目
1コマ目 9:00~10:30	ウォーミングアップ タスク(=プレゼンテーション)の説明	作成したプレゼンテーションの内容を確認・更新
2コマ目 10:45~11:45	『みんなの日本語初級I』 第1~17課復習	漢字プリント 第1~14課復習
(休憩)		
3コマ目 12:45~13:45	プレゼンテーションで用いる表現の練習	発表練習
4コマ目 14:00~15:00	プレゼンテーションの内容をグループで作成	発表 振り返り

ブロックコースの大まかな実施内容である。今回のブロックコースでは、タスクベースでカリキュラムを組んだ。ブロックコースの開講前に、日本語でドイツの観光地についてプレゼンテーションを作ることと、その発表の様子を動画に収め日本人留学生からコメントをもらうことをメールで周知した。そういうわけで、2日間にわたるプレゼンテーションの作成に取り組んでもらった。当日までに割り振られた都市の情報を個人で集めておいて、1日目でグループメンバーと共有してもらう形をとった。

ブロックコース終了後、学生に感想を書いてもらった。実際に留学生におすすめできるというやりがいや、初めて日本語でプレゼンテーションしたことへの達成感を肯定的に捉えるコメントが多くあった。漢字学習については、部首について着目する観点が新しいというコメントをいただいた反面、初めて聞いた概念で分かりづらいという指摘もあったことから、まだ改善の余地はあると考えた。とはいえ、日本語Ⅰから日本語Ⅱへ進級する学生にとって良い復習の機会を作れたうえ、自分たち実習生にとってもカリキュラムを作る良い経験になり、とても有意義な学びだと思った。

4. その他の活動

実習外では、日本デーやDoKomi という日本のアニメのコミックコンベンションなど、日本文化に触れることを目的としたイベントやドイツ語・日本語ランゲージ、日本語学校といった日本語学習支援ボランティアの活動に参加する機会があった。さらに、定期的にStammtisch というMoja の学生だけで集まる食事会があり、そこで大学一年生から修士課程までの学生と楽しく交流することができた。さらに、華道体験ワークショップの手伝いや競技カルタ、着物、書道クラブなど、学生と一緒に学ぶさまざまな機会が存在していた。私は学生から声をかけてもらい、DoKomi で日本人アーティストのサポートやグッズ販売などを担当した。来場者の皆さんとの交流を通じて、多くのドイツ人が日本のコンテンツから日本語の勉強を始めたことが分かった。また、アニメならではの口語的表現の難しさや漫画のオノマトペとふりがなを読みこなすには時間がかかるという学習上の問題点も知ることができた。

5. 実習を終えて

実習を始めた最初の頃は、右も左も分からず、何より 90 分間の授業を一人でやることへの不安が大きかった。実習に行く前、大学の授業で 15 分間の模擬授業しかやったことがないため、それより 5 倍も長い時間をどのように組み立てればよいか、ドリル練習のレパートリーをどのように増やすかが、さっぱり見当がつかなかった。また、分かりやすい説明のコツや学生との接し方など分からぬことだらけで、果たして教壇に上がるか自信がなかった。また、提出した教案は毎度修正すべき箇所があり、授業が終わったあと多くの反省点を残した。しかし、試行錯誤を繰り返しながら、ゆっくりだが着実に成長していると実感できた。全ては指導教員の的確なアドバイス、もう一人の実習生の温かいフォロー、学生たちのやさしさのおかげである。日本語教師としての知識だけではなく、みなさんに支えられ、励まされた経験を忘れずにこれからも頑張っていきたいと思う。

最後に、この機会を下さった大阪大学の筒井先生と櫻井先生をはじめ、さまざまなことを教えてくださった藤田先生や浜津先生などデュッセルドルフ大学の先生方、及びサポートしてくださったチューターや先輩方、ともに学び、成長した実習生の仲間に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



写真1 Moja の学生たちと